

# 主体的に思いや考えを伝え合う児童の育成

## ー児童理解に基づいた外国語活動の授業を通してー

大和郡山市立筒井小学校 教諭 高 良 宗 彦

TAKARA Munehiko

県立教育研究所 指導主事 杉 浦 朝 香

SUGIURA Tomoka

### 要 旨

外国語活動の授業でやり取りや発表の活動を行う際、児童の安心感や児童同士の関係性によって意欲に違いが表れることに注目した。

Q-U (Questionnaire Utilities) や授業アンケート等のアセスメントから読み取れる子どもたちの課題を指導者が認識し、児童理解を深め指導者と児童、児童同士が良い関係を築けるよう活動のスタイルや内容を工夫した授業を実践し、リフレクションを通して授業改善を図る取組を行った結果、関係が良くなり、思いや考えを伝え合う児童の姿に効果が確認できた。

キーワード： 外国語活動、安心感、関係性、Q-U、アセスメント、児童理解

## 1 はじめに

急速に進展する国際化、情報化社会において、子どもたちには身に付けた知識・技能を活用して直面する課題に対して自ら思考・判断し、主体的に取り組む力、他者と協力が必要な場合はコミュニケーション力を生かし、課題を解決するために情報や自分の考えなどを伝え合う力を育成することが求められている。しかし、教室で行うグループでの話し合い活動では、発言力のある児童の発表の場となってしまう、自分の思いや考えをもつことをしないで完全に受け身の姿勢になっている児童もいる。そこで、伝え合いの活動を通して、友だちの意見から学び、お互いの意見から更なる課題を生み出し、その課題を解決するための新たな考えを主体的に出し合う子どもたちを育成したい。

しかし、発話することに対して不安を抱えている児童がいる。不安を払拭するにはどうすればよいのか。子どもたちに、伝え合いを通して学ぶことの大切さと楽しさを感じさせるためには、児童一人一人に対する理解を深めた上での授業改善が必要である。そこで、子どもたちが目を輝かせて主体的に思いや考えを伝え合う姿になるよう今回の研究課題を設定した。

本研究では、児童理解を深めるためのアセスメントとして「Q-U (Questionnaire Utilities)」(以下「Q-U」という。)を用いることとした。Q-Uは、河村・田上(1997)によって開発された児童生徒理解と学級集団理解のためのアンケート尺度である。Q-Uを用いると、児童の回答結果により、【学校生活意欲(やる気のあるクラスをつくるためのアンケート)】と【学級満足度(いごこちのよいクラスにするためのアンケート)】が分かる。担任はこれにより学級集団の状

態と個別の援助ニーズを認知することができる(河村、2004)。また、ルール(規律・被侵害得点)とリレーション(関係性・承認得点)の視点からの学級集団の現状を把握することもできる。Q-Uを活用することで、児童観察だけでは見取ることができない児童の状態を知ることが児童理解を深めることにつながると思われる。ただし、留意点として粕谷(2019)は「教師の力量の評価でないことの確認」をすべきであることを指摘している。研究する教科としては、コミュニケーション活動の多い外国語活動の授業において取り組むこととした。

## 2 研究目的

児童が主体的に思いや考えを伝え合うようになるために、アセスメントを通して個々の児童理解を深め、外国語活動においてコミュニケーション活動を効果的に設定できるよう授業改善に取り組む。そして、児童の関係性、発話する際の安心感や意欲の変容について検証し、指導方法を探る。

## 3 研究方法

### (1) 研究期間

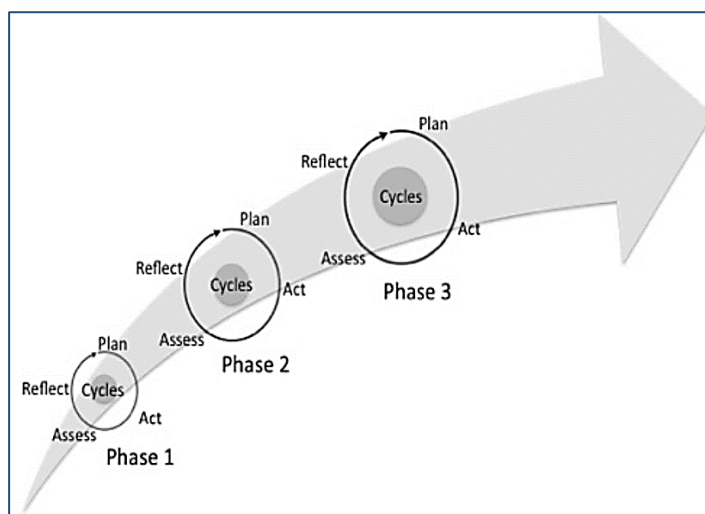
令和元年5月～12月

### (2) 実施校

大和郡山市立筒井小学校

### (3) 研究方法

本研究を進めるにあたり、アクション・リサーチ(以下「AR」という。)の手法を取り入れた。指導者が自分の理想とする児童の姿と現実の姿を明らかにし、課題を見いだす。課題解決に向けてゴールを設定し、ゴールを達成する手立て、つまり授業内容を考え、実践する。実践の効果をはかるために、アセスメントとして指導者の児童観察、授業記録等に加え、アンケート等の客観的データを収集する。他者のアドバイスも大切にしながら、アセスメントの結果からリフレクションする。リ



Noriyuki Inoue Ph. D. Professor Faculty of Human Sciences Waseda University

図1 ARのイメージ

フレクションを通して気付いた課題に対する手立てを考え、授業実践する自己研修の方法である。井上(2019)は、Phase 1として、「Action Plan」(現状分析・ゴール設定)をし、「Action」(授業等)を起こし、収集したデータの「Assessment」(検証・分析)をする。そして、「Reflection」(改善点を考える)をすることでPhase 1のゴールが達成されたと見なすと、Phase 2の「Action plan」へと移行していくと示しており(図1)、本研究もこのプロセスに沿って進めていくこととする。

### (4) 検証方法

授業記録・児童観察、授業の振り返りシート、学期末に行う外国語活動授業アンケート、Q-Uから児童の変容を分析する。

#### 4 研究の経過

##### (1) 5月～7月 (Phase 1)

#### ア 現状分析とゴール設定 (Action Plan)

##### (ア) 現状分析

年度当初の授業で指導者として気になっていたことは、外国語活動のコミュニケーション活動になると引っ込み思案になる児童がいたということや、指導者の英語による指示への反応が鈍く、すぐに行動に移せる児童が少なかったことである。また、学力に課題のある児童や対人関係に不安を抱えている児童もいたため、一部の積極性のある児童の発言や反応のみで授業が進むことが多い状態であった。そして、英語に対して自信をもてない児童も多く、話す内容が分からないまま活動に入ってしまう、参加できない児童もいたことである。さらに、挙手して発表する児童は少数で、一斉に活動した際には積極的にコミュニケーションを図ろうとせず、固まった人間関係のグループ内だけのやり取りになっていることが多いことであった。

授業記録（資料1参照）からも分かるように、自分から話しかけることに不安がある児童は、活動をしないままその時間を過ごしている様子が見られた。単元の終わりに何ができるようになっていいのか児童がイメージできていないため、単元を通して学習する内容と本時のめあてを意識できていない様子であった。指導者と児童が単元の見通しを共有できていなかったためである。そして、準備はしているが、振り返りシートを記入する時間がなくなるなど、1時間の授業計画を見直す必要があると分かった。

また、児童観察から児童2名（A児、B児）が特に活動に参加しにくい状態であることを確認した。

2名の状況は以下の通りである。

A児：全体での活動では、友だちとあまり関わらないようにしている様子が見られた。発音練習ではとても小さい声かまたは声を出していないことが多い。教科書で顔を隠す場面も多く見られ、やり取りの活動ではじっと終わるのを待つことが多い。指導者や友だちの様子をよく見ているなど、周りの動きへの関心は高い。

B児：授業の準備をしていないことが多い。絵カードを用いた発音練習や繰り返し練習をすると活動に参加しなくなる。発音はするが、口の開きは小さく声も小さい。発音しないこともある。

以上の課題を踏まえ、ゴール設定シートと計画シート（資料2参照）を作成し、取組をスタートした。

##### (イ) ゴール設定「学級の児童全員が楽しく参加できる授業実践」

学級の児童が全員参加できる授業を計画し、児童が外国語活動でのコミュニケーション活動を楽しんで主体的に思いや考えを伝え合ってもらいたいとの思いからゴール「学級の児童全員が楽しく参加できる授業実践」を設定した。

Phase 1のゴール達成の手立てとして、以下の点に取り組んだ。

##### ① 【指導者と児童が単元のゴールイメージを共有する。】

単元の終わりに何ができるようになるのかを示し、児童が学習の見通しをもてるようにすることで、本時の学習が自分自身の学力向上にどう繋がるかを想像でき、意欲が高まると考えたから

である。

## ② 【クラスルーム・イングリッシュを用いる。】

『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』によると、「クラスルーム・イングリッシュは、児童のリスニング能力を飛躍的に向上させるというのではなく、「英語の授業の雰囲気づくり」としての意味合いが強い。」とある。また、教師が積極的に英語を使用することにより、児童が一生懸命に教師の英語を聞こうとする態度を引き出すことになると示している。授業で用いる頻度の高いクラスルーム・イングリッシュについて、毎時間の授業始めにリズムや音楽に合わせてフレーズと動作を確認し、定着させることで、児童が指導者の指示をよく聞き、何をすれば良いかを理解できるようになると考えた。

## ③ 【学習計画に既習事項を用いた言語活動を設定し、指導者がデモンストレーションをする。】

具体的に何をするのかを分かりやすく丁寧に示すことで、児童が自信をもって活動できるようにするために取り入れた。

## ④ 【振り返りシートを活用する。】

児童が自分の学習の姿や気付いたことを授業の終わりに振り返る機会を設定し、自己評価をする。そのため、授業の始めには必ずめあてを示し、児童が授業中めあてを意識しながら学習に臨めるようにした。

## ⑤ 【活動への気持ちを高める。】

児童が「やってみよう」と思えるように、楽しい要素を取り入れ、児童に興味をもたせる活動内容を毎時間設定する。

## イ 授業記録&結果 (Action & Assessment)

### (ア) 授業記録・児童観察より (資料1、3～8)

毎時間クラスルーム・イングリッシュの確認を行ったことで、児童が指導者の指示を理解しスムーズに自分で行動する姿が見られるようになった。クラスルーム・イングリッシュは1週間に1フレーズずつ増やし、リズムや音楽に合わせて身振りを付けて発音する(図2)。少し慣れてくると、速さに変化をつけて児童が楽しく、無理なく覚えられるようにした。新しいフレーズが加わるが、何度も繰り返すため、自信をもって大きな声で参加できた。さらに身体を動かすことで緊張感がほぐれた様子で、楽しそうに活動する姿が見られた(資料3、4、6～8参照)。

ターゲットセンテンスを自信をもって発話できるように、練習する方法と回数

を増やした。練習する際には、指導者が良い例を示すことで児童も恥ずかしがらずに発話できた。またペアでのやり取りに慣れ親しむ活動をしてからいろいろな友だちと行う言語活動に移ることで、当初に見られた「何を言っているかわからない」という様子は見られなくなり、自信をもって発話できるようになっていた(資料3～8参照)。

年度当初、振り返りシートを記入する時間が確保できなかった(資料1、3、4参照)が、授業

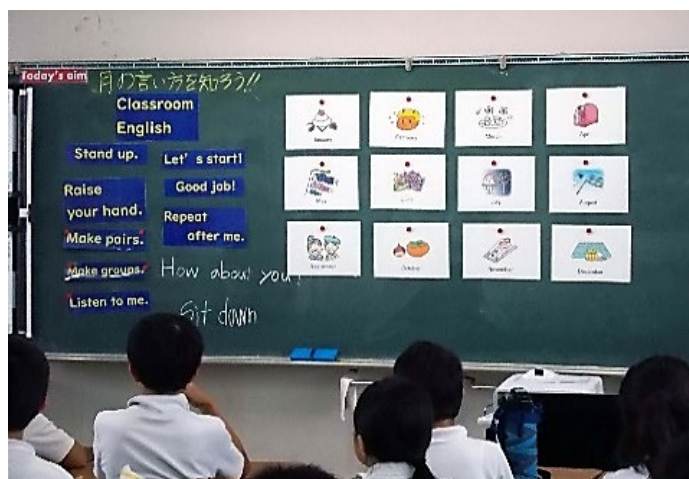


図2 クラスルーム・イングリッシュの様子

計画と単元計画を見直すことで児童が学習の振り返りを行う時間を確保できた。さらに、計画を見直したことで、慣れ親しむ活動から言語活動へ授業の流れもスムーズになった。

課題については、授業記録に細かく残すことで、即対応できるものから個々の児童に関することまで多くの課題を改善することができた。

6月20日(木)「Alphabet」の授業(資料7参照)後の研究協議で、改善点として、グループワークの時、指導者の説明をしっかりと聞くために、黒板を背にすることがないよう座る習慣をつけること、そして、グループワークではグループ対抗の競争の要素を取り入れたり、全員立たせて終了したら座らせたりするなど協力した達成感を分かりやすく示すことを確認した。

活動に参加することが難しかったA児、B児の変容(授業記録より)は次の表1の通りである。指導者の声かけや友だちとの協力により、A児、B児とも活動に参加できるようになっていった。

表1 A児・B児の行動記録(授業記録より)

A児	5/21	友だちと挨拶せず、一人で活動の時間を過ごした。
	6/4	指導者の支援もあり、活動に参加する。
	6/6	指導者の支援もあり、発表する。
	6/13	ABCソングのとき小声で歌う。テリトリーゲームには最初参加したが、後半は参加しなかった。
	6/20	Activityに参加した。カードを友だちと協力して並べていた。最後にカードを集めるとき、グループの児童と楽しく会話していた。
	7/9	Activityに笑顔で参加した。グループのみんなど協力していた。
B児	5/21	友だちと挨拶せず、教室を歩いていた。
	6/6	学習準備はなし。相互評価では、友だちの評価をした。発表は何も見ずにした。
	6/13	学習準備をする。Activity-1から参加しなくなる。
	6/20	Activityに参加した。ほぼ一人でカードを並べたり、最後にカードを集めたりした。
	7/9	Reviewで参加しなくなったが、Activityから笑顔で参加していた。

#### (イ) 授業の振り返りシートより

6月6日、「Hi, friends! Lesson7 What's this?」の単元においてクイズ大会(図3)をした(資料5参照)。グループでの発表の活動で相互評価をさせることに取り組んだ。振り返りシートでは、友だちの良いところをたくさんとらえ、自分のがんばったことも評価できていた(図4)。相互評価をすることを通して、友だちから自分への評価が自信になり、また、友だちのがんばりを意識することで「自分もこうしたい」という向上心につながっていることが窺われた。

記述部分からは、「クイズ大会はとても楽しかった。」「友だちがいいところを書いてくれてうれしかった。」「次は大きな声でできるようがんばり



図3 クイズ大会の様子

たいと思った。」「みんな発音が上手だった。自分もうまくなりたい。」のような児童の気付きや感想があった。1学期末の外国語活動授業アンケートでも「クイズ大会は楽しかったですか」の項目に32名の児童が「そう思う・どちらかといえばそう思う」と答えた。

#### (ウ) 学期末に行う外国語活動授業アンケートより (資料9参照)

1学期末の外国語活動授業アンケートでは、「英語の授業は楽しい」に肯定的に回答している児童は31名、「英語の授業は好きだ」「英語の授業の内容はよくわかる」「英語の学習は大切だと思う」「もっと英語を使って話せるようになりたい」の項目にも9割前後の児童が肯定的な回答をしている。子どもたちが楽しく活動に参加できるよう1学期に取り組んだ結果、学習に対する好意性と大切に思う気持ちは高まったと思われる。しかし、「学習した英語を使って先生や友だちと会話することができる」に5名、「学習した英語を使って発表することは楽しい」に6名の児童が否定的な回答をしており、「学習した英語を使って友だちと会話することは楽しい」「学習した英語を使って発表しやすい雰囲気だ」には10名を超える児童が否定的に回答していることから、コミュニケーション活動における英語での発話に自信のなさを感じていることと、友だちに対しての不安を抱えている児童が約3割ほど存在していることが分かった。

#### (イ) 第1回Q-U結果より

第1回Q-U検査による本学級の状態(図5、6)は、学級生活満足群が68%であり、全国平均の43%と比べて多く、大半の児童が学校生活に満足していると考えられる。

「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート(Q-U検査)」の間1「あなたのクラスの人たちはあなたに声をかけたり、親切にしたりしてくれますか」、間2「あなたのクラスには、いい人だと思う友だちやすごいと思う友だちがいますか」、間7「自分たちのクラスは明るく楽しい感じがしますか」に児童全員が肯定的に回答している。友だちのこと

●グループの友達の発表はどうだったかな。チェックしてね。

友だちの名前	声の大きさ	表情	What's this? が言えた。	ヒントで It's ~ が言えた。
	△	△	△	○
	△	◎	○	○
	○	○	◎	◎
	△	◎	◎	◎
	◎	○	◎	◎
	◎	◎	◎	◎
	◎	◎	◎	◎

◎とてもよくできた    ○できた    △頑張っていた

【振り返り】今日の活動について、あてはまるマークに○を圈こう。

クイズ大会で It's ~ が言えた	😊	😊	😞
クイズ大会で What's this? が言えた	😊	😊	😞
クイズ大会で That's right. が言えた	😊	😊	😞
伝えるために工夫した	😊	😊	😞
友達のをしっかり聞いた	😊	😊	😞

●クイズの発表をする時、頑張ったことを言こう。

声を大きくすることをがんばりました。  
my job!  
友達に聞いたりして助けを借りたりして、みんなと協力して頑張りました!

図4 振り返りシート1

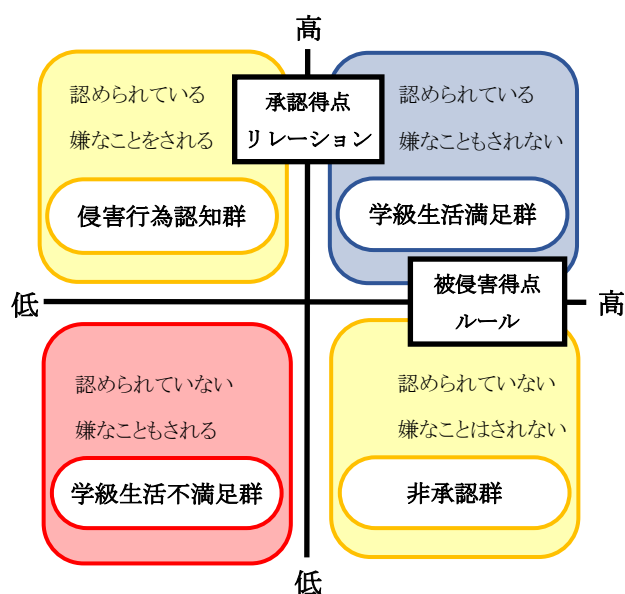


図5 学級満足度尺度

は、親切で前向きだと感じている。しかし、問3「あなたは、クラスの人から好かれている、仲間だと思われていると思いますか」には6名が否定的に回答している。自分のこととなるとなかなか肯定的に捉えられない児童が少なくない。自分が友だちにどう思われているのかに対して不安を感じている。

そして、「いごちのよいクラスにするためのアンケート（Q-U検査）」の問1「あなたは運動や勉強、係活動や委員会活動、趣味などでクラスの人から認められることがありますか」には9名の児童が「ない」と答え、問5「授業中に、先生の質問に答えたり、自分の考えや意見を言うのは好きですか」に15名が「好きでない」と答えた。しかし、問6「あなたが自分の思ったことや考えたことを発表したとき、クラスの人たちはひやかしたりしないで、しっかり聞いてくれるとおもいますか」には32名が肯定的に回答している。問6において否定的に答えた2名の内1名は、学級で一番発言や質問をする児童であり、「あなたは、クラスの人から好かれている、仲間だと思われていると思いますか」の問いにも答えていなかった。この児童を含め、非承認群は8名であった。

授業の見取りでは発見できなかった児童もいた。

以上の結果から、自分が友だちからどう思われているのかという不安に加え、すごいなと認められていることもないと感じていることが、発表への引っ込み思案につながっているのではないかと考えた。非承認群の8名、そして学校生活不満足群の2名も承認得点は低い結果が出ているので、学級の中で自分が認めてもらえていないと捉える児童が多くいることを認識することができた。個々の児童の発言や発表に指導者からも承認する言葉かけをし、子どもたちが認めてもらえる場面の設定が必要であることが分かった。以上のことより、学級のリレーションを高めることが必要であることを認識した。

## ウ リフレクション (Reflection)

授業改善、指導力向上に取り組んだことにより、児童が外国語活動の授業の流れを理解することができ、見通しをもって学習を進めることができた。また、指導者のまとまった話を聞いたり、児童がペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりする Small Talk やクラスルーム・イングリッシュ等のパターン化された学習を繰り返すことで、児童の外国語活動に対する親近感が高まり、活動にも意欲的に参加することができた。A児はしっかり前を見るようになり、B児は以前より授業に参加する時間が長くなった。授業記録、児童の振り返りシートにより全員活動に参加できたことを確認し、Phase 1 のゴール「学級の児童全員が楽しく参加できる授業実践」を達成できたと見なした。

### (2) 9月～12月 (Phase 2)

#### ア 現状分析とゴール設定 (Action Plan)

##### (7) 課題

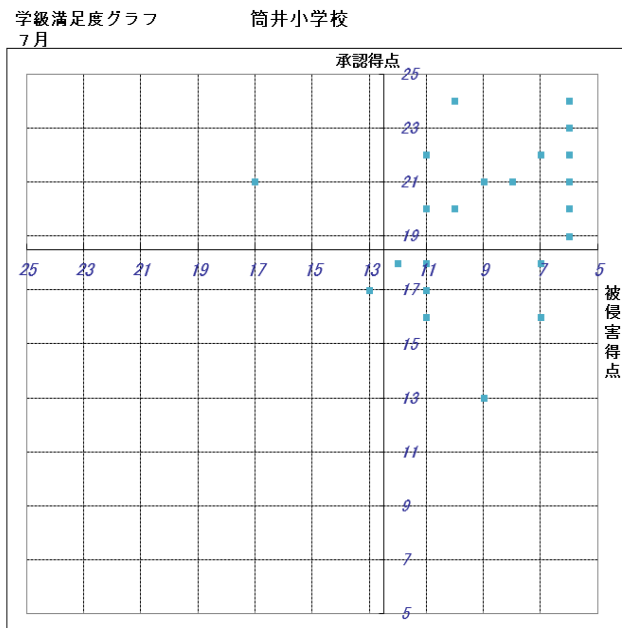


図6 第1回Q-U (7月) プロット図

担任としては、指示されたことには真面目に取り組めるが、もう少し積極的になってほしい、発言力のある児童に頼らずに、どの児童も挙手をして発言をしてほしいという願いがあった。また、活動の場面では、限られた人間関係での交流が多く、児童が誰とでも交流できる関係性が必要であると感じていた。

しかし、アセスメントにより、不安感があるため積極的に発表することやコミュニケーション活動を楽しむことができていないことが明らかとなった。自分の発表を聞いてくれることに自信をもち、相手が認めてくれているという安心感をもつことが必要である。大半の児童が学級の雰囲気が良いと捉え、友だちのことを「意欲的に取り組み、親切である。」と思っているが、学級の中で自分がどう思われているかに不安がある。外国語活動の授業に対する好意性は高く、もっと発話できるようにしたい、英語の学習は大切だという気持ちはあるが、やり取りや発表するには、学習内容に対しても不安があるのではないかと捉えた。

#### **(イ) ゴール「児童の関わり合いや横のつながりがある活動を取り入れた授業展開」**

Phase 1の結果から、コミュニケーション活動による学びをより活性化させたいと考えた。そのためには、児童の関係性をより良いものにしていく必要がある。個別に見ていくと、特定の間関係の中でしか関わろうとしない児童や、知識はあるが行動に移せない児童が存在している。個人の学びを全体で共有し、学級全体での学びとするために、ゴール「児童の関わり合いや横のつながりがある活動を取り入れた授業展開」を設定した。

Phase 2のゴール達成の手立てとして、以下の点について取り組んだ。

##### **①【役割を与えて関係をつくる、役割交流をする。】**

一人一人がしっかり役割を果たすため、グループの人数を6人から4人にする。「あなたがしなかったら、みんなが困る」ということを伝え、グループで協力して達成する目標を示す。

##### **②【Small Talkでは、指導者と児童のやり取りを増やす。】**

1学期は児童に「聞く」機会をより多くもたせるために行い、児童の前で話していたが、2学期は児童の間を歩きながら、児童にどんどん話しかける。児童の発話から話を広げる。発話しようとする意欲に褒める声かけを行い、「間違っても大丈夫」という気持ちと友だちが発話する姿を見て「自分も言いたい」という気持ちをもたせる。

##### **③【児童同士のやり取りを増やすため、ペアワークとグループワークを設定する。】**

ペアワークでは、隣の席の友だちだけではなく、ローテーションをしてパートナーを替え、いろいろな友だちとやり取りをする機会を増やす。グループワークは、普段あまり話さない友だちとも協力して活動を行う機会を与えるために設定する。

##### **④【聞く姿勢の大切さを伝える。】**

やり取りや発表の活動を通じて、友だちの話すことをしっかり聞くことの大切さを浸透させる。友だちが「聞いてくれている」という経験を重ね、安心感を高める。

##### **⑤【学習内容を定着させる。】**

学習した英語を自信をもって使えるように、慣れ親しむ活動を充実させる。

##### **⑥【振り返りシートを活用する。】**

振り返りシートの児童の自己評価に関する問いは、めあてや指導者のねらいに合った内容に工夫する。

#### **イ 授業記録&結果 (Action & Assessment)**

##### **(7) 授業記録・児童観察より (資料10~13)**